

彼女は生まれ変わる

蘆骨

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

落命し、投げ出され、彼女は目覚める。

再び生まれ落ちた彼女は世界を俯瞰する。

人の行く末を眺めるのだ。

・・・娯楽を兼ねて。

※この作品はキャラ崩壊、インフレ、無双、最強主人公、オリジナル設定、独自解釈、ご都合、ニワカなど、諸々の要素を含みます。

原作至上主義、インフレ嫌い、オリキャラ嫌い、オリ主嫌いに当てはまる方は不快な思いをする可能性がありますので拝読されない事を推奨します。

こんなキャラがいたらこうなるのかあくらの感覚でお読み下さい。

設定が追加されても対応できないので、if世界くらいの認識でお願いします。

目次

一	落下のち溺死	1
二	生まれ変わり	4

## 一 落下のち溺死

自分は死んだ。

登山中に誤って足を踏み外して崖から落下し、川に落ちた後の溺死である。

どうして死んだのに意識があるのかって？

HHHHH！・・・それは自分でも分からない。

川に落ち、もがいた末意識を失い、次の瞬間何も無い真っ黒な空間へ放り出され、身体も動かさずに落下する感覚に只身を任せる。そんな状況である。

死後の裁判とやらも受けた記憶がないので、地獄体験ツアー〜4億3200万年片道切符の旅〜でない事を祈るばかりだ。

それにしてもまさか20と数歳で死ぬことになるとは夢にも思わなかった。

願うならば来世は落下死や溺死をしない強靱な肉体に生まれたいものである。

叶ったら叶ったで人外確定だが。

まあ、そんなことよりも・・・いつまでこの状態が続くのだろうか。本当に阿鼻地獄よろしく2千年間このまま？

そこまでの悪行をはたらいた覚えはないので勘弁して欲しい。そう心の中で呟いていた次の瞬間。

ザパンツ！という音と共に身体感覚が戻る。

「！！！！？？？」

但し、水の中で。

「(水中!?死んでない!?走馬灯!?)」

軽いパニックになりながらも水の侵入を防ぐために慌てて口を塞ぐ。

が、直ぐに気がつく。

「・・・脚、着く」

立ち上がって水面から顔を出し、そう呟く。

そして、先ほどまでの慌てようが酷く滑稽に思え・・・凄く悲い気持ちになった。

結論から言うと、

助かってませんでした。

なんでそんなこと分かるのかって？なに、誰にでも直ぐ分かる簡単なことさ！

立ち上がった後、濡れっぱなしっていうのも嫌なので陸地へ上がり、身体に異常がないかチェックしようとする。

すると違和感を感じて自分の体を見ればあら不思議、男の夢を具現化したようなあるはずのないたわわなものが胸に二つくっついてるからだよコンチクショウ!!!

死んだ事はまだ良い。いや、良くないがこの際置いておく。

まさかのTS？元々男なだけど!?男の象徴だつて無くなつてー

——— んん？・・・んんん!?

確かに無い、無いんだけど・・・あれえ？

男でないなら女に生まれ変わった筈。

それは主張の激しい胸部装甲が証明している。間違いない。

しかし、確認するとアレどころか人体構造的になくってはならないものまで・・・あつれえ？

いやどゆこと？なくなると人体に異常をきたすものまで消滅してるんですけど？

そう混乱している時、少し前の思考がフィードバックする。

体が動かせない真っ暗な空間にいた時のことだ。

『叶ったら叶ったで人外確定だが』

うん。

『人外確定だが』

・・・うん。

『人外』

・・・いや、まさか・・・ねえ？

## 二． 生まれ変わり

そのまさかでした。

まさか本当に無いなんて・・・もちろん断定した理由はそれだけじゃない。

行っていないのだ、呼吸を。

パニックになっていたせいで気付くのが遅れたが、身体の感覚が戻ってから呼吸をしていなかったし、水が口に侵入することも無かった。

更に水中でも視界もクリアになっている。

パツと確認できた身体に起きた変化というか異常はこのくらい。

ああ・・・それと外見も変わっていた。

身長が目測体感で大体2mと少しのボンキュッボンだいなまいとぼでー。

瞳はタイガーアイの様にも見える金褐色。

髪は腰下まで伸びた艶のある黒髪ロング、角度によって銀にグラデーションがかって見え、漆を塗ったように美しい。

顔も生前？とは似ても似つかなく、吊り目の凛とした相貌。

思わず、水面に映る姿を2度見してしまった。

あ、服はちゃんと来てたよ？へそ出しで袴のスリット部分からハリのある太腿が覗くなんかえっちな巫女装束みたいなもの。

まあ正直そんなことはどうでも良いのだ、目を背けていた現実比べれば問題じゃない。

いや、ほんとに。

その問題っていうのが現在地である。

いや、困ったね。

現実逃避してても仕方ないんだけど、したくもなっちゃうよねえ・・・だって此処、完全に孤島で周り360度海なんだもの。

オーシャン！マル！モーリエ！絶海の孤島！

いくら何でも今世ベリーハードよ!?

・・・と、そんなこんなで死んだ魚の目をしながら膝を抱えて今に

至る。

10分ほど微動だにせずたつぷりと現実逃避したが、座つても仕方ないので取り敢えずこの島の外周を歩き回ることにした。

運が良ければ船が通りかかるかもしれないし、島の大きさは知っておきたい。

そう考え外周を回り、色々と散策した結果、ある程度の島の大きさと植生が分かった。

この島自体は大した大きさではなく、体感1時間程度で1周出来る。

だがこの島に生えている植物は日本国内では見たことがない、勿論知らないだけという可能性もあるが、背の高いシダの様な植物に細かい網目状の樹皮を持つ樹木人の気配のない樹林。

控えめに言っても日本に自生しているとは思えなかった。

まあ、何が言いたいのかというと、

「・・・詰んだ」

希望ゼロである。

お先真つ暗である。

ワタシ ニホンゴイガイ ハナセナイ。

そんな絶望的な状況を自覚したが、呆けていても生きていける訳ではないので、思いつく限り手あたり次第手を付けてみることにした。こういうのはネガティブになったやつから死ぬのだ。ポジティブにいこう。

先ずは寝床である、

できるだけ海から離れ過ぎない場所がいい。行き来に体力を使うし渡船を見逃すのもいただけくない。

助けてくれるとも気付いてくれるとも限らないが、可能性は少しでも拾っておきたい。

諸々を考慮して、丁度いい大きさの木の洞を見つけることができた。

雨風を凌げるなら上々だ。







ロール出来るようになった。

それも、まるで変身出来なかった事の方が不自然だったのだと言わんばかりのレベルで。

足だけを変化なんてことも可能である。

同時に直感で感じていた、下半身だけではまだ完全に変身出来ないということ。

むむむ、もう夜……。

謎ではあるが、幸い光源が無くても昼と変わらない様に辺りを見通すことが出来る。

一旦区切りをつけるために島へ上がるべきか……でも小骨が引つ掛かった時みたく気持ち悪いんだよねえ。

いつか、続行続行。

別に眠くもないから大丈夫でしょ。

ムズムズするし早速やっちゃお。

頭の中でそうまとめると彼女は静かに目を閉じる。

そして外界を遮断し集中高め自分の中にある力を解き放ち始める。

それと同時に彼女の肢体を青白い光が包み始め、時間が進むごとに彼女を包む光は際限などないと主張するかの如く発光を強めていく。

変化は爆発的だった。

彼女を一際強い白光が蔽いつくすと、嵐の前の静けさを暗示するかの如く、世界から一瞬音が消失する。

そして次の瞬間、全てを飲み込み、惑星の反対側にいても感じられる程に強大な閃光と共に彼女は真にこの世界へと生まれ落ちた。